

資料涉獵余話

その76

上伊那郡南向村(現た。

中川村)出身の遠山英一(一八六二〜一九五五)は、本郡とも繋がりが深い歌人である。

遠山は明治十一年御歌所参候となり、後、寄人に進み、昭和二十二年御歌所廃止まで長く寄人を務めた。その間、伊那国風会や日本歌道奨励会等の指導にあたり、歌集に『虚心園歌集』正・続・拾遺の三冊がある。

昭和二十五年、今村良夫がその遠山に標題の歌集への出詠歌を依頼した。すると、次のような返書が寄せられ

同君宅に一泊せしことも有之御なつかしく、尊君は同信夫君の息子と存候。

次に、御詠草御まはしに成れば、よろこびて拝見可仕候。先ずは右御返事まで。(昭和二十六年二月)

記されている。また、同姓の故か、英一が頼主の良夫を信夫の息子と誤って推測しているのもおもしろい。

天龍峡や園原に心寄せる御歌所寄人遠山英一

歌集『伊那』(霧旅篇)資料から下

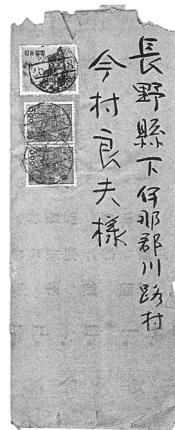
鎌倉 貞男

十二日付書簡・句一首だけを紹介する。読点筆者) 一読して明瞭な通り、実に懇懇かつ丁寧な書きぶりである。文中、明治後期から大正初期に旧川路村長を務め、門人でもあった今村信夫を訪ねたことが

一方、遠山は人も知る仮名書きの名手であった。だから、信濃宮の造宮時、詠進歌を一帙として大鹿村信濃宮神社に奉献したこともあるようだ。今回、今村への書簡に添えられた次の文書から、思いがけないことがわかった。

(姑射)

大正天皇御製集、二



遠山英一からの来信(一部)



天龍峡を探勝する遠山英一(中央礼服) 今村信夫歌集『篁園』より

千代までかきのこしあり

十年拜写被仰付(板下)彫刻。昭和二十一年十二月、御式年祭神前に御供へになりて、皇太后様にはいと御満足にて御慰勞の御言葉を賜りしよし、知人のききて御名譽などいはれければ、はからずもかしこき仰せかがふりて恥をずかったという事実で

(故人敬称略)